

イノベーション・マネジメント研究センター

I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020年度大学評価結果総評】（参考）

イノベーション・マネジメント研究センターの研究活動は活発に行われている。研究・教育実績は、研究プロジェクトが23件、シンポジウム・セミナーなどが10件実施され、また、全3部3日間からなる公開講座が実施された。また、対外的に発表した研究成果は、学術雑誌1冊、研究叢書1冊、ワーキングペーパー20編の発行である。2019年度は、学術雑誌、ワーキングペーパーで英文による寄稿があり、また、外国人客員研究員の委嘱や外国人講師を招聘した国際セミナーも開催されるなど、国際的な研究活動と成果が発信されたことは高く評価できる。

2020年度中期目標・年度目標は、研究活動・社会貢献・社会連携ともに適切に設定されている。重点目標は「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」であり、学術雑誌（掲載論文数10本）、ワーキングペーパー（10本）の発刊、シンポジウムまたは所員の教育活動も支援できるような公開講座（5回）の開催等により、研究成果物の量的・質的向上が期待される。

なお、外部からの組織評価として、第三者の評価は受けていないが、年5回の運営委員会や所員懇談会が実施されており、適切な運営が行われているといえる。今後は、他の研究所の取り組みなども参加にしつつ、更なる取り組みが期待される。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

当センターの活動について、十分に評価して頂いている。2021年度も他研究所の取り組みなども参考にしながら引き続き適切で活発な研究活動が行われるよう運営していく。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターの研究活動については、2020年度大学評価委員会で高く評価されており、2021年度も他研究所の取り組みなども参考にしながら引き続き適切で活発な研究活動が行われるよう運営していくとしている。COVID-19の影響下で進められた、シンポジウム・セミナー、公開講座のオンライン開催など、デジタル化への試みも評価できる。第三者評価に関しては、未実施なことから、今後実施可能な体制づくりが期待される。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2021年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2020年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2020年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

1. 研究プロジェクト

- ①「起業家教育プログラム研究会」 田路 則子
- ②「ロジスティクス・クラスター研究会」 李 瑞雪
- ③「ブランド・コミュニティ研究会」 竹内 淑恵
- ④「機能横断型チームの形成史：トヨタ自動車を対象に」 梅崎 修
- ⑤「スポーツコーチング・イノベーション研究会」 荒井 弘和
- ⑥「クラウドソーシング研究会」 西川 英彦
- ⑦「AIを用いた学習分析とその周辺に関するビジネス調査」 児玉 靖司
- ⑧「比較経営史研究会」 竹原 正篤
- ⑨「産業クラスターの知的高度化とグローバリゼーション」 洞口 治夫
- ⑩「プロ・スポーツチームにおける社会的影響と関与の関係について」 井上 尊寛
- ⑪「消費者行動とマーケティング研究会」 新倉 貴士
- ⑫「金融イノベーションと新しいファイナンス理論」 山寄 輝
- ⑬「金融市場における情報伝播とその周辺に関する統計分析」 高橋 慎

- ⑭「日本における新たな鉄道経営史の構築」 二階堂 行宣
- ⑮「組織メンバーの日常行動とイノベーション創出」 永山 晋
- ⑯「イノベーションプロセス研究会」 豊田 裕貴
- ⑰「日本企業における『新たな国際化プロセス』に関する研究会」 丹下 英明
- ⑱「企業家史研究会」 長谷川 直哉
- ⑲「日本における企業内カウンセリング・EAP の課題と問題解決の方法—企業イノベーションの観点から—」 末武 康弘
- ⑳「ファンエンゲージメント概念の再検証」 吉田 政幸
- ㉑「ディスクロージャーの変化と拡大」 中野 貴之
- ㉒「情報ネットワーク利用とインタラクション」 橋爪 絢子

2. シンポジウム・セミナー等

- ①シンポジウム「エノガストロノミアとテリトリー —日本とイタリアの農業文化の発展— (Enogastronomia and Territorio: Development of Agricultural Culture in Italy and Japan)」
2020年10月10日 YouTube Live
- ②コーネル大学リテール・マネジメント・プログラム・オブ・ジャパン[第11期] 【協力】
2020年度の本学開催=2019年11月13日・14日、2020年1月15日・16日
法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5
- ③シンポジウム「アフターコロナの移動空間とメディア環境」2021年3月10日 zoomにて開催
- ④シンポジウム「ブランド・インキュベーション戦略:「第三の力」を活かした価値協創」
2021年3月13日 zoom録画YouTube配信

3. 公開講座

「女性企業家の軌跡」2020年10月17日、11月14日、2020年12月12日（全3部）
Zoomにて開催

【**根拠資料**】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- 1. 研究プロジェクト <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/project.html>
- 2. シンポジウム・セミナー等
<http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/symposium-2.html>
- 3. 公開講座 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/lecture.html>

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2020年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

- 1. 学術雑誌1冊
イノベーション・マネジメント No.18
- 2. 研究叢書1冊
 - ①No.20 『日本の企業間取引—市場性と組織性の歴史構造』 金容度
 - ②No.21 『IFRS適用の知見—主要諸国と日本における強制適用・任意適用の分析—』 中野貴之
- 3. ワーキングペーパー
 - ① No.224 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective of SDGs and ESG 4 Ryoichiro Okada: Aiming for Integration of Economy and Morality
 - ②No.225 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective of SDGs and ESG 5 Meizen Kinbara: The Pioneer of Social Business
 - ③No.226 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective of SDGs and ESG 6 William Merrell Vories: Towards a Socio-economic System for Mutual Support Based on Stewardship

- ④No.227 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective of SDGs and ESG 7 Jokichi Takamine: From Bioscience to the Intellectual Property Business
- ⑤No.228 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective of SDGs and ESG 8 Sakichi Toyoda: No Product, No Invention
- ⑥No.229 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective of SDGs and ESG 9 Michio Suzuki: Customer-oriented Business Strategy Utilizing Knowledge
- ⑦No.230 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective of SDGs and ESG 10 Shojiro Ishibashi: Pioneer of Automobile Tire Manufacturing in Japan
- ⑧ No.231 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective of SDGs and ESG 11Kota Yano: Established a Life Insurance Business through Mutualism
- ⑨No.232 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター シンポジウム「エノガストロノミアとテリトリーオー日本とイタリアの農業文化の発展」講演録
- ⑩No.233 非営利組織における予算統制の態様
- ⑪No.234 ショッピングセンターの原型・勸工場の隆盛と衰退
- ⑫No.235 民衆駅と駅ビル型ショッピングセンターの誕生
- ⑬No.236 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective of SDGs and ESG 12
Hachisaburo Hirao: Practice of Management Based on the Spirit of Mutual Aid and Personality Education

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

1. 学術雑誌 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html>
2. 研究叢書 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/publication.html>
3. ワーキング・ペーパー http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/working_paper.html

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2020年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2020年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2020年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

1. 引用

ベンチャー学会誌 No.36（2020年9月）3件に引用された

（1）学術雑誌『イノベーション・マネジメント』No.15「田路則子著『大学生の起業意識調査レポート—GUESS2016調査結果における日本のサンプル分析—』2018年3月」が引用

①『起業家によるゲスト講義を中心とした起業家教育プログラムの効果』松井克文

②『アントレプレナーシップ教育におけるProject-Based Learningの効果と可能性』松永正樹

（2）イノベーション・マネジメント研究センター叢書 No.19「田路則子著『起業プロセスと不確実性のマネジメント—首都圏とシリコンバレーのWebビジネスの成長要因—』2020年3月」が引用

③『スピノフ、継承、集積』福嶋路

2. 叢書の書評については、当センター発刊の学術雑誌で書かれている。

①イノベーション・マネジメント No.18「田路則子著『起業プロセスと不確実性のマネジメント—首都圏とシリコンバレーのWebビジネスの成長要因—』2020年3月」（評者：江島由裕）

※その他多くの学会、学術雑誌等で書評・引用の対象となっていると思われるが、把握していない。

3. 受賞

叢書 No.19 「田路則子著『起業プロセスと不確実性のマネジメント—首都圏とシリコンバレーのWebビジネスの成長要因—』2020年3月」が以下を受賞。

①商工総合研究所 2020年度中小企業研究奨励賞 準賞

②電気通信普及財団 2020年度テレコム賞 奨励賞

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

<p>1. 日本ベンチャー学会史 No.36 http://www.venture-ac.ne.jp/magazines/venture_review/2020/</p> <p>2. イノベーション・マネジメント No.18 http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html</p> <p>3. 商工総合研究所 2020 年度中小企業研究奨励賞 https://www.shokosoken.or.jp/commendation/selected.html 電気通信普及財団 2020 年度テレコム賞 奨励賞 https://www.taf.or.jp/award/telesys/</p>
<p>④ 研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）</p> <p>※2020 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。</p> <p>特に第三者評価は受けていない。年 5 回の運営委員会を実施し適正な運営を行う。また、所員懇談会を実施する。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況</p> <p>※2020 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び 2020 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。</p> <p><2020 年度中の応募></p> <ul style="list-style-type: none"> ・科研費：21 件 <p><2020 年度中の採択></p> <ul style="list-style-type: none"> ・科研費：11 件 <p>※いずれも代表者のみ、継続を除く。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>⑥ 研究所（センター）における研究活動等に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。</p> <p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウム、公開講座のオンライン開催（YouTube、zoom） ・学術雑誌レフェリー審査時のペーパーレス化（2021 年度より投稿時のペーパーレス化開始） ・閲覧室の予約制導入 ・研究所会議室、閲覧室、事務室の定期清掃、換気、アルコール消毒液設置 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>当センターは、様々な研究分野を専門とした所員で構成されている。専任・兼任所員は 10 学部・研究科の教員から成り、幅広い分野の見解を共有できるよう積極的に取り組んでいる。また、運営委員も複数学部・キャンパスの教員に委嘱し多様な意見交換が出来るようにしている。</p> <p>研究活動は活発で、研究プロジェクト等で研究力を高め、セミナー・シンポジウム等で研究成果を公表し、学術雑誌や叢書等の定期刊行物を発行することで外部への認知を高めている。所員に対しては、研究プロジェクト資金の助成、セミナー・シンポジウムのサポート（助成金含む）や、ワーキングペーパー発行の際の英文校閲料一部補助等、様々な研究支援体制を整えている。</p> <p>2020 年度においては、新型コロナウイルスの影響で研究活動が制限される面もあったが、シンポジウム・公開講座のオンライン開催や学術雑誌レフェリー審査時のペーパーレス化、閲覧室の予約制導入など新たな方式を取り入れ、好評を得た。特にシンポジウム・公開講座のオンライン開催においては、例年以上の参加者数で、海外からの視聴もあった。コロナを機に加速するデジタル化への要望に今後も応え適切で活発な研究活動に取り組むたい。</p>	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

<p>イノベーション・マネジメント研究センターの研究活動は活発に行われている。研究・教育実績は、研究プロジェクトが 22 件、シンポジウム・セミナー等が 4 件実施され、また、全 3 部 3 日間からなる公開講座が ZOOM により実施された。また、対外的に発表した研究成果は、学術雑誌 1 冊、研究叢書 2 冊、ワーキングペーパー 13 編の発行である。</p> <p>研究成果に対する社会的な評価として、3 件の引用があり、研究センターが発行する学術雑誌に叢書の書評が掲載され、叢書が 2 件の受賞を受けている。「その他多くの学会、学術雑誌等で書評・引用の対象となっていると思われるが、把握していない」と記されており、社会的な評価を把握するための引用数の把握は今後の課題である。</p> <p>なお、外部からの組織評価として、第三者の評価は受けていないが、年 5 回の運営委員会や所員懇談会が実施されており、適切な運営が行われているといえる。</p> <p>科研費等外部資金への応募は 21 件、採択は 11 件で、例年通りの採択に至っており、積極的に外部資金を獲得していると評価できる。</p> <p>COVID-19 に対する取り組みは、シンポジウム・セミナー、公開講座においてオンラインを利用し、積極的に取り組んでいたと高く評価できる。</p>

III 2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動							
1	中期目標	研究プロジェクトを公募し、研究のサポートを行うとともに、所員の研究成果を学術雑誌、研究叢書、およびワーキングペーパーの形で積極的に発信することで、学界に貢献する。さらに、特色あるデポジット・ライブラリーを構築し、他に類のない体系的な図書・資料をコレクション方式により重点収集、整理、公開利用を行うと共に、収集した図書・資料の活用を通じて調査・研究の向上に寄与する。							
	年度目標	研究成果物の質と量の向上をはかる。所員に広く申請を促し、進捗管理を行う。							
	達成指標	叢書 2 冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数 10 本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー 10 本を目指す。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>叢書 2 冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数 16 本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー 13 本（うち英文 9 本）を発刊し、所員の研究成果を積極的に発信することができた。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	S	理由	叢書 2 冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数 16 本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー 13 本（うち英文 9 本）を発刊し、所員の研究成果を積極的に発信することができた。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	S								
理由	叢書 2 冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数 16 本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー 13 本（うち英文 9 本）を発刊し、所員の研究成果を積極的に発信することができた。								
改善策	—								
No	評価基準	社会連携・社会貢献							
2	中期目標	継続的な資料収集を通じて、流通産業ライブラリーの充実を図ると共に、研究者また学生への資料提供を行うことで、流通・消費財産業の研究の促進、また人材の育成に貢献する。							
	年度目標	継続的な資料収集と、これらの貴重資料の適切な保管、長期的な維持を目指した取組を行う。							
	達成指標	特に貴重資料を中心に資料収集を行い、配置の際には除菌を施すこととする。また資料を保管している BT 地下書庫の環境保全・発生防止事業を行う。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>2020 年度目録登録数 1,817 冊。寄贈および購入により資料収集を行い、カビ除去を施し</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	S	理由	2020 年度目録登録数 1,817 冊。寄贈および購入により資料収集を行い、カビ除去を施し	
執行部による点検・評価									
自己評価	S								
理由	2020 年度目録登録数 1,817 冊。寄贈および購入により資料収集を行い、カビ除去を施し								

			た上で登録を行った。書庫の環境保全・カビ発生防止事業としては、サーキュレーター・除湿器の設置、書庫内清掃、資料除塵、空調設備の除菌防カビ処置、防カビ講習受講（職員）を行った。
		改善策	—
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
3	中期目標	公開講演会、シンポジウムを開催することを通じて最新の研究成果を社会に還元する。	
	年度目標	継続的な研究活動の推進につながるシリーズ講演の実行や、海外の研究機関との関係づくりに尽力する。	
	達成指標	シンポジウムまたは講演会 5 回を目標とし、講演録やサマリーを残せるようにレベルの充実をはかる。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	B
理由		新型コロナウイルスの影響でシンポジウムまたは講演会の開催は 3 回に留まった。感染拡大防止のため春学期は開催自粛をお願いしたが、様々な検討を経て 10 月に登壇者のみ来校しオンラインにて開催する方式を取り入れた。その後感染状況が再び悪化したため講師含め完全オンライン形式で 2 回開催した。	
改善策	回数こそ目標に届かなかったが、オンライン開催が好評で遠方（海外在住）の方含め例年以上に多くの方にご参加頂けた。来年度も新型コロナウイルスの影響が続くと思われるので、引き続き開催方法を工夫し研究活動と社会への還元を継続したい。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
4	中期目標	公開講座や寄付講座の継続実施に向け、適切なテーマ・開催方法等を検討する。	
	年度目標	学外研究者を対象とした公開講座を実施する。	
	達成指標	所員の教育活動も支援できるような公開講座を実施する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		公開講座も登壇者のみ来校しオンラインで開催し例年通り 10 月～12 月の 3 回を無事に終えることができた。こちらも例年以上の参加者数で、「オンラインがありがたい」「参考資料のリンクなどその場で見に行かれて好都合」等、好評の声を頂けた。	
改善策	—		
<p>【重点目標】 研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献</p> <p>【目標を達成するための施策等】 2020 年度は所長、副所長および運営委員の多くが入替わり、新規に委嘱する所員もいるが、適切で活発な研究活動が行われるよう周知・運営する。 また、既存の組織・分野の枠を超えた学内外の研究者との交流により、研究を活発化させ、研究成果を広く発信する。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 2020 年度イノベーション・マネジメント研究センターとしては目標をほぼ達成し、活発な研究活動と研究成果の発信ができたと考える。2020 年度早々から新型コロナウイルスおよび緊急事態宣言の影響でイレギュラーな対応を迫られたが、適切な研究活動と運営ができた。 来年度も新型コロナウイルスの影響およびデジタル化等への要望が高まることが予想される。新しい方式を取り入れながら適切で活発な研究活動が引き続き行われるよう運営したい。</p>			

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

<p>イノベーション・マネジメント研究センターにおける 2020 年度の目標は適切に設定され、学術雑誌への掲載、叢書 2 冊の発刊、ワーキングペーパーの発刊については、目標を達成している。新型コロナウイルスの影響で、シンポジウム/講演会については目標回数を満たせなかったものの、オンラインで開催され、遠方の参加者など、参加者が増加し、研究者同士の交流、また研究者と実務家の交流が継続できていたことは評価できる。また、公開講演会もオンラインで例年通り開催され、社会への還元も継続できていた。 貴重資料を中心に資料収集も進められ、書庫の環境保全・カビ発生防止事業も適切に行われた。</p>

IV 2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	研究プロジェクトを公募し、研究のサポートを行うとともに、所員の研究成果を学術雑誌、研究叢書、およびワーキングペーパーの形で積極的に発信することで、学界に貢献する。さらに、特色あるデポジット・ライブラリーを構築し、他に類のない体系的な図書・資料をコレクション方式により重点収集、整理、公開利用を行うと共に、収集した図書・資料の活用を通じて調査・研究の向上に寄与する。
	年度目標	研究成果物の質と量の向上をはかる。所員に広く申請を促し、進捗管理を行う。
	達成指標	叢書 2 冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数 10 本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー 10 本を目指す。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	継続的な資料収集を通じて、流通産業ライブラリーの充実を図ると共に、研究者また学生への資料提供を行うことで、流通・消費財産業の研究の促進、また人材の育成に貢献する。
	年度目標	継続的な資料収集と、これらの貴重資料の適切な保管、長期的な維持を目指した取組を行う。
	達成指標	特に貴重資料を中心に資料収集を行い、配置の際には除菌を施すこととする。また資料を保管している書庫の環境保全・発生防止に努める。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
3	中期目標	公開講演会、シンポジウムを開催することを通じて最新の研究成果を社会に還元する。
	年度目標	継続的な研究活動の推進につながるシリーズ講演の実行や、海外の研究機関との関係づくりに尽力する。
	達成指標	シンポジウム又は講演会 5 回を目標とし、新型コロナウイルス感染症に対する行動方針に基づき開催方法を検討する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	公開講座や寄付講座の継続実施に向け、適切なテーマ・開催方法等を検討する。
	年度目標	学外研究者及び一般参加者を対象とした公開講座を実施し研究成果を公開することで、社会貢献する。
	達成指標	公開講座は 2007 年度から毎年実施しており、2016 年度から受講料を無料とした。毎年行われる公開講座として一部の研究者には認知度が高いが、更に多くの方に参加頂けるよう周知及び開催する。
<p>【重点目標】 研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献</p> <p>【目標を達成するための施策等】 今年度も新型コロナウイルスの影響及びデジタル化等への要望が高まることが予想されるので、新しい方式を取り入れながら適切で活発な研究活動が行われるよう運営する。</p>		

【2021 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは、研究活動、社会貢献、社会連携ともに中期目標・年度目標が適切に設定されている。また、叢書 2 冊発刊、学術雑誌への掲載論文数 10 本、ワーキングペーパー 10 本の発刊、シンポジウム・講演会（5 回）等、達成指標が具体的に記されており、到達したかどうかを客観視でき高く評価できる。重点目標である「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」については、新型コロナウイルスの影響から、デジタル化等の新しい方式を取り入れながら、適切で活発な研究活動が行われるよう期待される。

【大学評価総評】

イノベーション・マネジメント研究センターの 2020 年度の研究活動は、COVID-19 感染拡大の影響で、計画どおりの運営が困難であったと察することができるが、学術雑誌への掲載、叢書 2 冊の発刊、ワーキングペーパーの発行については目標を達成し、活発な研究活動が行われた。シンポジウム・セミナー等は目標を下回ったものの、オンライン開

催により参加者が増加した。公開講座もオンライン開催で、例年通り行われた。それぞれの評価項目ごとの場面で工夫がなされ、計画された年度目標がほぼ達成されたことは、高く評価できる。

研究成果に対する社会的な評価を測るため、書評や引用数などの把握は重要であるが、現状では十分把握していないとされているため、今後の課題として取り組んでいただきたい。

2021年度のイノベーション・マネジメント研究センターの評価項目は、適切に設定されていたと評価する。さらに設定された評価項目に対して、具体的な達成指標が設定されており、達成する努力が推し量れる点が評価できる。重点目標である「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」について、新型コロナウイルスの影響から、オンライン化、デジタル化等の新しい方式を取り入れながら、適切で活発な研究活動が行われるよう期待される。

なお、自己点検・評価シートでの自己点検において「問題点」が挙げられていなかったが、2020年度目標が概ね達成されていた場合についても今後の発展のために必要であると考えられる。